

馬橋和巳全集

第五卷

河出書房新社

高橋和巳全集 第五卷

小説5 ©1977

一九七七年 八月十日 初版印刷
一九七七年 八月十五日 初版発行

著 者 高橋和巳

発 行 者 佐藤皓三

発 行 所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五
電話 〇三―三五五―五三一
振替東京〇―一〇八〇二

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

憂鬱なる党派

解題・補記

581

3

第五卷 小説 5

憂鬱なる党派

第一章

1

華麗なショー・ウィンドーや、疲れて粘土色の腫をした新聞売りらのまえを、動くともみえぬ遅々とした雑沓が彼方へと流れていった。

細かい都会の埃が、銀色に輝く百貨店の無数の窓から、こちらの幅広い石橋の欄杆にまで一面にただよい、真夏の太陽がその埃の膜を透してさんさんと輝いていた。雑沓にもまれている人間の一人一人は、みな、死んだように無表情だった。男も女も一樣に唇をうすく開け、眉をしかめ、視線をあらぬ方に力なく注いでいる。黄昏にはまだ間のある烈しい斜陽に、数知れぬ人間の表情が汗ばみ、個性を殺されて皆どこか似通って見える。たしかに、そこにはある共通した翳があった。それは鼻の高低、耳朶の肉付や髪の色合いの相違の上に、貧しい真実となつて露呈していた。だれでも知っているだろう、巧妙に修正された写真にもなお現われでる、あの悲しみでも喜びでもない放心の影にそれは似ていた。

人々の凝固した表情を照らす、その同じ日の光が、人波の頭上を飾る広告や看板、そして店々の巨大なウィンドー・ペインに反射して銀色に輝いていた。ときおり、人波のなかで誰かが叫び声をあげた。だが、人がその方を振りかえるころには、叫びは群衆のざわめきに融け、首をめぐらしても、もうあと形もなかつ

た。雑沓はすぐ、なにごともしなかつたように流れつづける。横から眺めると、行列はほとんど慎ましいものにさえ思われることがあつた。そこでは、生活の内面をいろどるかすかな憂愁や、思慮分別、そして、ささやかな喜びなどは見事に無視され、たえず、生活の流れそのもののような鈍い単調な足音だけが悲しげに響いた。

中年の夫婦が真中に子供をはさみ、たがいに長年の屈辱に耐えるかのように黙々と歩んでゆく。酒氣をおびた夫を冷たく眺めながら、それでも夫と肩を並べて歩む人妻。家庭での仏頂面をそのまま持ちこんできている紳士。へし折れそうなハイヒールをはいた娘。白髪を光らせる老婆。彼らは、野の香りや稲穂の波を求めて郊外へ出る労力を惜しみながら、日々の倦怠や憂鬱をひととき忘れようとして、ここにやってきたのだろう。今まで、幾度も期待を裏切られておりながら、まだ紫煙の渦巻く劇場や狭い珈琲ルームの一隅に、あるいは見おとしていた安息が宝石のように煌めいていないとはかぎらない、と思ひながら。

本屋の店頭に立ち、小首をかしげて群衆の流れを眺めていた西村恆一は、その時、久しくおさえにおさえていた「後悔」の念が、せきを切つたように流れだすのを覚えた。

「どうしたんだろう……」

後悔のおとずれはなにも今が初めてではなかつた。たとえば人影の途絶えたプラットホームや並木道の散歩、あるいは深夜ねむりをまつ床の中でも、不意に湧きおこることがあつた。

咎の汝に属さざるとも……

教えよや、十字架もなく墓もなく

空しく果つべき身なりや否やを

単調な音楽のように、あるいは海の波音のように、後悔の念は彼の胸をうつ。

西村は書店の敷居のところで、柱に背をもたせ、小刻みに足踏みした。その間にも、その不思議な感情は、彼みずからのものではない一個の生物のように成長しつづけていた。

償いがたき悔恨、

われらの記念碑……

それにしても一体、わたしはなにをこんなに後悔することがあるのだろうか？ 彼は、その理由を検討してみようとする。しかし、一向に掴みどころはなく、手がかりは皆無だった。むりもない。彼の後悔の念は、すでに前提となる悪しき行為すら要求しなかったから。ただ、それは雑沓の波動に乗って流れていき、そして一周すると、また彼の腺病質な肉体に帰ってきた。

空はやけに晴れわたっている。快晴に恵まれる真夏にしても、こうした天気は珍しい。ところどころ、白く高層にたなびく真綿雲が地上の群衆の動きよりもしずかに流れている。瞳は眩しく、蒼穹に染めおとされた白い雲の断片を追い、脚はなお無意識のうちに群衆に歩調を合わせていた。その空の蒼さに視線をはせているうちに、ふと一瞬、彼は隊伍を組んだ天使たちと草笛の音を思いうかべ、つぎの瞬間、身を虚空につるして雑沓に向かって自己の〈悪〉をあばきたく思った。

「当分、雨の降る心配もない」彼は目をふせて呟く。

それにしても、この後悔の念は、いつ頃から彼の胸を蝕みはじめたのだったろう？ たしか、毎日毎日がお祭り騒ぎのようだった少年期にも、微笑と闘争、羞恥と屈辱に満ちていた学生時代にも、こういう奇妙な経験はなかった。それは、ただ単に感性的に未熟だったからにすぎぬにしろ、まだ彼には無縁な感情だった。日頃から過去を恋人のように大切にしてきた彼が、自己の昨日に関して誤りを犯すはずはない。たしかに、その頃はまだ後悔の念とは無縁だったのだ。たとえば、その頃空虚よりは後悔を！ としたり顔に呟いたこと

があつたとしても、まだ後悔が、彼の存在の形式になど、決してなつてはいなかった。では一体いつごろから？ 思いめぐらしてみても、それは不思議にわからないのだった。もっとも、はっきりとは思ひだしたくない秘められた意志が、彼の中で悪性遺伝子のように幅をきかせているからかもしれぬ。

中学生のころ敗戦にあつてから、彼は自分の感覚を越えた理論体系や膨大な仮説を、そして權威ありげなもの的一切を信じなくなっていた。敗戦と、それがどのようにに關係するのか、よく解らない。しかし、錯綜し複雑に入りまじっているものを、目の前でたちまちに整理してみせる精神の魔術は、彼には常に許しがたい不誠実のように感じられた。それは才能に恵まれなかったからではなく、記憶以上のものとして今も彼を支配している或る経験のせいだった。あまりにも急激な価値變動を何度も経験しすぎたのだ。それは、おそらく彼だけの経験ではなかった。そして、あの閃光も彼の頭上にだけ花咲き散つたものではなかった。人々は同様に教育され、感激し、疑惑し、そして不意に崩れ去つたのだから。

彼の背後の硝子戸には、ひしめき合い、摩擦し合いながら流れる雑沓の影が映っていた。人はみな、わずかのあいだ、その硝子の面におのれの影を投げ、そしてその影を消して通り過ぎてゆく。群衆のなかには、骨格の逞しい駐留軍兵士の姿も混つていた。異国の浪費家のそばには、きまつて、原色のワンピース、土気色の肌をした娘がつき添っている。豪華なハンドバッグをさげ、口の中になにか含んで声高に話しかけ、笑いあつて通りすぎる。ときには、ただ一人の駐留軍兵士に数人の娼婦が一同になつて付きしたがっていることもある。女たちは白痴のように笑い、女王のように闊歩する。しかし、その憐れな姿もすぐ消え、つぎには、月給取り、警官、学生、女給など、さまざまな人間が現われる。それにしても、その硝子の面に幻燈される人波の、なんと悲しげであることか。

〈後悔〉の念は、処理のすべも分らぬまま、徐々に、そして確実に肥大していった。彼はただ、自分の体臭にまもられ、わずかに動物的に抵抗するだけだった。最後に、もしこの現代にではなく別な時代、別な風土、別な社会に生を享けたのであつたなら、もし仮りにあの悲しみの都市に住んでいたのではなかったらと、あ

り得ない仮説に救いをもめようとするとき、後悔の念はその極限に達し、そして、おもむろに退潮しはじめるのであった。そして、その退潮の感覚は、少年期——すべてが萌芽の状態にある貴重な時期との無惨な訣別のそれに似ていた。もたらされる悲哀もまた、ほとんど似ていた。

「暑いですねえ。これじゃ馬だって卒倒しちゃう」立て掛けられたよ、しずの影にいた氷屋の店主が言った。「いくら鞭で尻を引っぱいたって、口から泡をふいて動きゃせん。馬だって癲癇を起しちゃう」

日光をさえぎるよしずが同時に風をさまたげていた。暑さはむしろ戸外よりひどい。店主は脂肪質の体軀を、倦怠と戯れるように小刻みに揺すっていた。坐っている彼の膝の上には、真黒に日焼けした縮れ毛の女の児が睡っている。

「馬は、こんな日によく日射病にやられるんですよ。とくに支那のような大陸の埃っぽい道路だと、ちょっと荷車を曳かすと、きつと音をあげてしまう。黄土が妙に足に粘りついてきましてね。おんなじ場所を四、五へん、足踏みして首を横に振りましてね。口から牛のように涎をたらして横倒しになるんです」

「みぞれを下さい」

西村は扇風機が唸っている奥まったデスクに位置すると、重い黒カバンをテーブルの上において言った。

扇風機の風は油臭く、そのうえエナメル臭いがした。飾り気のない板壁には、値段表と、C級の飲食店許可証、映画俳優のプロマイドが斜めに傾けて貼られてあった。その部屋の気配は、来る日も来る日もアパートの一室で机にむかっていた頃の西村の憂鬱、紫色に腫れあがった精神の沈滞と似ていた。葉指の胼胝たぶの上にインクのしみをつけ、無為に煙草を吸い、その紫煙を茫然と目で追っているとき、不意に体がぐいぐいと沈みだす。すべての行為の無意味さを予告するように、あるいはまた、どんな人生の果てにもただ一つの結果しかないことを啓示するように、意識が暗い奈落へと墜落してゆく。なぜなのか、それも彼には解らない。

西村がその大衆喫茶店に入ったのは、ただ渴を癒やすためだけではない。駅についた直後、電話で連絡を

とった旧友の古在秀光が、西村の用件をも考慮して、待ち合わせの場所として指定したのだ。古在とは旧制中学の時代から、とりわけ、聞け轟きを、怒濤の賦を、と、その寮歌にも歌われるように歴史もまだ新しくった広島高等学校の文科甲類に籍を置いたところからの知己であつた。もう十二年、ひと昔も前に、紡績工場経営者の次男であつた古在と、女学校校長の長男であつた西村とは、ともに連合国の慈悲によつて戦災をまぬがれた古都の官立大学に入学した。一人は、自由に自己の嗜好に従つて十九世紀のヨーロッパ精神史を専攻し、西村の方は、卒業後の就職にたいする父の配慮に盲従して文学部で英文学を学んだ。七年前、彼は卒業して、学制改革後も共学にならなかつた宗教財団経営の女学校の教員になり、その友人は、おのれ一人の才覚で新興の業界新聞社に入社した。資本も経営も安定しない小新聞社を古在は故意に選んだのであることを、西村はその頃から、自分にはない覇氣への羨望まじりに推察できていた。おそらく、牛後よりも鶏口という彼の計算は実を結んでいるだろう。彼の存在は、きっと、その企業の中で不可欠のものとなっているにちがいない。——それにくらべて自分は……

久しぶりの西村の訪問を、古在はどのように受けとめるだろうか。知己、知己と繰り返し呟きながらも、彼の中では、それは楽しい予想にはならなかつた。彼には、かつて共に生活し同じ学園に学んだ旧友と対等に語りうる地位も地盤もなく、旧友との邂逅に胸をふくらませる稚氣も消えていた。往年の夢想癖は、無気力な田舎落ちや、大学院への復帰や、学問的能力への懷疑から恥をしのいでした再勤務や、そして突然の、いまだに根拠のはかり知れぬ、あの「一切の断念」と、それにつづく狂気の時間のあいだに、憂鬱な変貌を強いられてしまつていた。はじめ、彼は戦後の荒廃と頽廃からものわかりよく脱皮し、まともなゼントルマンたるために、少年期の飢餓や憤怒、そして一瞬の閃光とともに都市全体が廃墟と化した死の記憶を消し去ろうとつとめたものだった。日常性の論理、つまりは今日一日の小さな喜びと悲しみにのみかわつていった。いつしか内在化された廃墟と死のイメージから逃れるためには、エリートの大理想よりも、平凡な日常生活とその規律の方がより有効だと思われたからだつた。夢想の国がそれで一つの遺跡と化しても、平

和な日常と安定した精神は彼のものとなるだろう。そのスノビズムが一応の成功を見、西村は平凡な学校教員となり、旧家の娘をめとり、子供を一人生んだ。ただあとは、自己の周辺に固い砦を築くことだけだった。だが、彼は不意に褐色の、煮えたぎるような激怒を覚えて道をふみはずした。不意に、俗物の価値である日常は無に帰し、遠い悲惨な、ぬらぬらと皮膚のずるけてゆくような過去の感覚に彼は捉えられた。そして彼はたちまちにこの時代に対する順応能力を失ってしまったのだ。高等学校から大学、そして教員生活をも含む十余年もの年月の間、懸命に過去を忘れようとし、自分の感情を糊塗したあげく、彼は不意に憤激にかられて、時代から脱落し、日常の規律からもはみ出してしまったのだ。毎朝一定の時刻に県営のアパートを出、近隣の人々とあえば上品に会釈をかわしたその微笑も消え、彼はほとんど誰とも口をきかなくなった。日曜日ごとに妻や子をつれて遊園地にゆき、優しい音楽の流れる食堂で食事をする習慣もなくなった。いや、その習慣を維持しようにも、彼には経済的な支えがなくなった。勤めをやめてしまったからだ。

退職してから、しばらくのあいだ彼は従来の出無精とは打ってかわって奇妙な漂泊の念にかられて日々を過したものだ。不意に人間が各自定まった住居を持ち、持たないものも裸の宿借のように必死に自分の貝殻を求める気持が馬鹿げたものに見えた。勤務先が一定して不変であること、帰宅すべき降車場が、いつも小さな花壇と薄汚れたベンキ文字のある同じ郊外の小駅であるとは、なんと不思議なことだろう。今日は天蓋の葡萄色に黴んだ、いつも地響きを立てている配電所うらの見慣れた小駅、明日は、海浜の藻の匂いが、鼻を、顔を、想念を、一度にはっと覆う寒村の駅であっては何故いけないのか。月給日には、二合も飲めば真赤になる酒を、飲むべきかどうかと思ひ惑い、その金を妻の好む田舎饅頭に費すことを善だと思っていたのは一体なぜか。あり金のすべてをポケットにねじこみ、夜汽車に乗って、なめらかな山肌が蜿蜒とつづく溪谷を見にいったぜいけないのか。彼はその頃、自分の子供よりも植物採集に興味を覚え、目的もなく、あちらの山、こちらの湖へと旅行し、退職金や失業保険の大半をそれに費した。何かが確かに変りはじめていた。いや、あの時、真面目な青年と言われ、実は是もなく非もなかった一人の人物が誰にも知られず死んで

いったのだ。あたかも、自分の立っていたアスファルトの道路に、影絵だけを残して死んだ男のように、一人の人物が後悔を残して死んでいったのだ。じりじりと精神の白血球をなくし、目に見えぬ嘔吐をしつづけ、十数年間も執拗に何事もなかったかのように振舞おうとしたあげくに――

「二十円のにしますか、それとも三十円？　蜜をね、蜜をはりこんどきますよ」

店主は坐ったまま手廻しの機械を動かして氷を掻いた。

「こういう商売をしているとね、人間が腐ってしまう。朝一日分のうどんを買いこみ、昼間氷を売って、夜は酒。毎日おなじことだ」

自嘲しながら、彼は棕櫚のように大きな掌で皿の上にもった氷をおさえて形を整えた。そう言えば、たしかに彼の眼は、なにか難解な腐敗の兆候をしめしていた。目が死ぬのが先か、肉体が減びるのが先か。戸口に垂らされた風鈴が彼の頭の上で、申しわけのように鳴っている。

「なんのこった。それは」机にうつぶせていた酔漢が部屋隅の暗がりから声をかけた。

「静かに寝とれ」と店主は言った。

学生やB Gもその貧相さに敬遠して暇な店にも、常連がいるとみえる。氷西瓜、氷金時、宇治茶氷などの品目に列んで、焼酎四十五円、合成酒五十円と貼札がある。腕の中に顔を埋めた男の頭の前にはコップが濡れて光っていた。

「人間が腐るちゅうのは、なんのこった、よう。おれのことをぬかしとったんだろ。眠ってるふりはしとっても根性まで眠っとるわけじゃないぜ。はつきりと言え、はつきりと。誰が腐るんじゃない」

男はふらふらと立ちあがり、西村の坐っているテーブルにやってきた。

「お前の脳味噌が腐りかけとるじゃよ」店主は男の頭を指さして言った。

「なにい」男は充血した目をまたいた。肥満した店主にくらべて体軀は、あたかも酔漢の経験の貧しさを象徴するように対照的に瘦せている。